

ASEAN グローバルプログラム を通して

高垣 尚義
Masayoshi TAKAGAKI
機械システム工学科 2年

1. はじめに

「ASEAN グローバルプログラム」とは、理工学部 2 年生の 39 人が 2018 年 8 月 28 日～9 月 6 日の間で、ベトナムのハノイ、シンガポールの両国の大学および企業を訪問する海外研修型科目である。このプログラムは、2 年生が対象となっており、ASEAN 地域の文化、企業、日本との関わりなどを現地企業の訪問、現地学生との交流を通して経験し、この経験をもとに、今後の学生生活を送るうえで学習目標や課題、将来の目標を設定することを目的にしているプログラムである。ベトナムには、8 月 28 日～9 月 2 日の間に滞在し、現地で事業を展開している日系企業の「鈴木栄光堂」、ベトナム企業の「Rikkei Soft」と「NTQ」の訪問や、ハノイ工業大学生と 2 日間にわたって、「ベトナムで日系企業の栄光堂の飴を売るには」というテーマの PBL を実施した。シンガポールには 9 月 2 日～6 日の間に滞在し、南洋理工大学 (NTU) の学生との交流や、実際の授業の参観 (体験)、研究室の見学を行い、さらに現地で仕事をしている日本人ビジネスパーソンによる講演会や交流会に参加できた。

本稿では、私がこのプログラムに参加した目的、そこで学んだことや感じたことの一部、それを踏まえた今後の課題を報告する。

2. 参加目的

私がこのプログラムに参加した目的は「自分の英語力の腕試し」であった。私は英語が苦手であるが、留学し、そのとき海外を経験することができたのなら、就職活動のときに有利になるのではという考えがあった。しかし、もし留学するとなったら 1

か月以上も海外に滞在できる自信がなかった。このようになかなか踏み出せないでいたときに、比較的短期間で 2 か国で密度の高い学修ができるこのプログラムの知った。そのため、このプログラムで海外を知り、自分の英語は現地ではどのくらい通用するのかを評価し、それからの英語の学習に結び付けたいと考えた。

3. 研修内容

このプログラムの中で私は特に、ベトナムのハノイでの企業訪問について報告する。ハノイの企業訪問では、日系企業の鈴木栄光堂、ベトナム企業の NTQ を訪問した。

3.1 日系企業への訪問

ハノイでの企業訪問は、8 月 29 日の午前、ベトナムのハノイ郊外にある第 2 タンロン工業団地の中にある鈴木栄光堂社を工場見学することができた。ここでは主に、キャンディーを製造している。私はこの企業を訪問してまず、ここに勤めている多くの人が女性であり、ベトナムでは男性よりも女性の方が働くという事実に驚いた。また、衛生面でキャンディーの品質を保つための除菌を、時間を決めて行っていることにも驚いた。日本では、食品の製造をするうえで除菌を行うことは当然のことのように感じられるが、ベトナムでは、そのような習慣がないとのことで、企業自体が除菌時間を指定することによって、積極的に除菌を促していることに、なるほどと感心した。さらに、キャンディーを製造するうえで多くのライセンスが必要なことも知った。

それらの中で、私が最も関心を持った点はベトナムの栄光堂の企業理念である。栄光堂には本社での企業理念があるにもかかわらず、現地には現地の企業理念として、「安全性やお菓子を通しての明るい生活」といった企業理念をつくられており、かつ、社員が常に意識しているとのことで素晴らしいことだと感じた。

私はこの企業を訪問して、ベトナムでの日系企業



鈴木栄光堂ベトナム工場での見学風景

の活躍などを学ぶことができた。私は、これまで海外に製造拠点を置いている企業は、生産コストを安く抑えるためだけであると考えていたが、今回この企業を訪問でき、その考え方が変わった。ベトナムに拠点を置いて、そこで独自の問題について考え改善し、その企業だけでなくベトナム自体が発展するように取り組んでいることに感心した。

3.2 ベトナム企業への訪問

ハノイでは、8月29日の午後にベトナムの企業の Rikkei Soft と NTQ に2つのグループに分かれて訪問できた。この企業訪問は2企業のどちらかのみであり、私は NTQ に訪問できた。NTQ はモバイルアプリの開発や事業系のアプリなどの開発をしており、ここではこの企業で働いている人と交流しながらの質疑応答ができた。この企業は日本の顧客も多いとのことではほとんどのベトナム人社員の方が日本語で会話することができ、企業自体で日本語を学んでいる人もいるとのこと。他国に必要性がある企業はその国の人に商品を買ってもらうためにも他国の言葉を勉強しなければいけなく、この点において日本も海外に目を向けていくうえで見習わなければならない点だと感じた。さらに、ベトナムでは残業という文化がなく、その日の仕事が終わって

なくても次の日に持ち越すとのこと、また、社員に圧迫感を与えたくないとのことと多くの社員が定時の17時に退社しているとのこと、それは素晴らしいことだと感じた。近年の日本では、残業が当たり前になってきていると感じるので、ベトナムのこのような点を見習うべきだと思った。また、その企業を訪れた時、偶然ベトナムのサッカーの国際戦（アジア大会）があり、そのようなときはさらに仕事を早めに切り上げて会社内でもTVを囲んで応援しており、自国愛の強さと会社の社員優先のマインドにも驚いた。

私はこの企業を訪問して、ベトナム人の仕事に対する生真面目さや国民性を学ぶことができた。この企業を訪問してみて、海外で働くとは日本では見られないことがあり、大小、あちらこちらに視野が広がり常に新しい発見ができるように感じ、海外で働いてみたいと思うようになった。

4. おわりに

今回のプログラムを通して、ベトナムとシンガポールという、ある意味で対照的な2つの国を訪問して、それぞれの文化、そこでの働き方や暮らし方、海外で働く日本人などについて学ぶことができた。また、日本に限定されていた視野、考え方や心の持ち方が変化したことによって、世界にも目を向けられるようになった。この10日間で、これからの大学生活や人生の課題として受け取ることができ、思考や視野が広くなり、人生の糧になり人生の選択肢が増えたように感じる。これからの大学生活を送るうえで、どのように行動するかを常に考えて動こうと感じられるようになった。

最後にこの場を借りて、このプログラムに関わってくくださった、企業様、現地の学生達、現地で働くビジネスパーソンの方々に心より御礼申し上げます。